

多声を聴く，他者と生きる

一言語から人と経験世界の多様性を問い直す―

企画責任者：高田 明（京都大学）

話題提供者：榎本剛士（大阪大学）

中野隆基（明星大学）

武黒麻紀子（早稲田大学）

高田 明（京都大学）

指定討論者：名和克郎（東京大学）

1. はじめに

20世紀初頭、米国のボアズやサピアが構想した言語学は、人とその経験世界の多様なあらわれ方に目を向けてきた。その基点にあった言語相対性の視点は、文化人類学に文化相対主義をもたらした。文化相対主義は北米発の文化的な営みを象徴する思想として、学界を超えた幅広い人々から支持を得るようになっていった。しかし近年、そのような研究がもっていた意義は忘却されてしまったかのようである。マスメディアは連日のように、孤立主義や保護主義、ヘイトスピーチやいじめ、コロナ感染者への差別や中傷の問題に至るまで、排除の図式が生活のさまざまな場に蔓延していると伝えている。そうした現代社会にあって、抑圧されつつある多様な声、フィールドで見聞きし、出会った人や出来事を、私たちはどのように引き受け、それらとどのように付き合っていくべきなのか。こうした問いを再考することがいま私たち、とりわけ社会と言語の学知を担う研究者に求められている。本シンポジウムでは、言語相対性や文化相対主義と直接向き合いながら、人の経験と言語が織りなす多様な世界を詳らかにしてきた言語人類学に焦点をあてる。そして、その研究から得られた知見が、多声を聴き、他者と生きることに於いて今日の私たちにどのような示唆をもたらさうのかについて、考えを深めたい。

2. 「他者」への多様なアプローチ

言語人類学は、長期フィールドワークで得られたコミュニケーションについての詳細なトランスクリプションを基盤として、言語と社会・文化の界面に生じる諸現象を分析してきた。その過程で、いくつかの研究グループはより限定された自らの領域と方法論を確立し、それぞれ別個の（サブ）ディシプリンとして成立していった（名和，2019）。また、当初は多くの言語人類学者が西欧社会から遠く離れた辺境の地に赴いていたが、現在では研究者の身近にあるコミュニティをフィールドに選ぶ者が少なくない。この背景には、「他者」と出会うために地理的な隔たりは必須ではないという認識の転換がある（高田，2019）。本シンポジウムでは、こうした言語人類学の広がりを知ってもらうために、できるだけ幅広い（サブ）ディシプリンをカバーできるように人選を行った。また提供される話題には、日本における言語人類学的な研究が多く含まれる。

3. 本シンポジウムの構成

まず榎本は、日本の中学校における英語授業を事例として、パース記号論に依拠する記号論的言語人類学の立場から「英語」という「テキスト」が立ち上がる過程を分析する。次に中野は、ボリビアの公教育で「正しい言語」として導入されているベシロ語の授業に注目し、「歌」の翻訳と実践をめぐる言語イデオロギーの作用を論じる。続いて武黒は、沖縄県石垣島の旧盆行事であるアンガマ問答において演者と観客の相互行為を特徴づけているユーモアを分析し、民族詩学に新風を吹き込む。最後に高田は、言語社会化論という観点から、日本の子育て場面で実践される言語ジャンルとしての「物語り」に焦点をあて、養育者―子ども間相互行為に「今―ここ」を越える「文化の文脈」がどのように導入されるのかを論じる。

参考文献

名和克郎 (2020). 序―「言語人類学」と「指標性」の概念をめぐる― 文化人類学, **84**(4), 431-442.

高田 明 (2019). 相互行為の人類学―「心」と「文化」が出会う場所― 新曜社

記号の様態と（コン）テキスト化のポリティクス

—日本の中学校英語授業に見る，その不確定性—

榎本剛士（大阪大学）

1. はじめに

コミュニケーション研究としての記号論的言語人類学では，コミュニケーションにおいて生起する諸記号が，どのようにしてコンテキストを指し示すか，そして，そのようなプロセスを通じて，社会・文化的に解釈可能な結束性を持つ出来事，すなわち「テキスト」が，どのようにして立ち上がるか，という問題が中心的な探究の対象の一つとなっている (Bauman & Briggs, 1990). 本発表では，日本の中学校における英語授業を事例に，その一端を示し，それを「多声を聴く，他者と生きる」という本シンポジウムのテーマへ繋げることを試みたい。

2. 記号の様態とコンテキスト化

パース記号論に依拠する記号論的言語人類学の視点をとれば，コミュニケーションにおいて生起する諸々の記号は，「類像記号」，「指標記号」，「象徴記号」の三種に分けられる。これらの記号が対象を指し示す様態は様々であるが，実際のコミュニケーションにおいて，これらは「メタ記号 (meta-sign)」としても機能する。それぞれの記号が互いを「コンテキスト」として指し示し合うこのプロセスは，それ自体，特定のコンテキストに投錨されており，そのコンテキストに根ざしたコミュニケーションの効果を創出すると考えられる (Agha, 2007).

3. テキスト化のポリティクスとその不確定性

上記の視座を定めたうえで，本発表では，「英語」という「テキスト」に着目する。「英語の授業」であるのだから，そこで学ばれていたり，使われていたりするのは「英語」である，ということも可能ではある。しかし，「英語」を所与のものとして，コミュニケーションの中で／コミュニケーションによって生み出される「テキスト」として位置づけると，その様々なあり様，および，それらの間の競合が見えてくる (榎本，印刷中)。

また，いったん立ち上がったように解釈できる「テキスト」は，後続するコミュニケーションにおいて，異なるコンテキストが指し示されることで，打ち消されてしまう可能性もある (Silverstein, 1992). こうして導かれる「英語」という「テキスト」の不確定性は，教室における「学び」の不確定性を指し示すものでもあろう。

4. いつもの場所で，「多声」を聴く

本発表が扱う事例は，ある意味，日本の中学校の「よくある風景」と言えるかもしれない。しかし，その「代わり映えのなさ」の中にこそ，自らが生きる社会を構成する「多声」は鳴り響いているのではないだろうか。また，本発表の枠組みは，原理上，「コミュニケーション (出来事) の記号論」となっていかにざるを得ないが，その時，それは必ずしも『言語』人類学であり続けなければならないわけではないと思われる。そうであるならば，本学会の「学術的多声」こそが，本発表で扱った問題の解明にとって，極めて重要なコンテキストである。

参考文献

Agha, Asif (2007). *Language and social relations*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Bauman, Richard, & Briggs, Charles L. (1990). Poetics and performance as critical perspectives on language and social life. *Annual Review of Anthropology*, 19, 59-88.

榎本剛士 (印刷中). メタ言語のメタ語用論—英語授業における対象言語の詩的生成とその社会化効果— *社会言語科学*, 23(1).

Silverstein, Michael (1992). The indeterminacy of contextualization: When is enough enough? In Di Luzio, Aldo, & Auer, Peter (Eds.), *The contextualization of language*, pp. 55-76. Amsterdam, The Netherlands: John Benjamins.

「多声的」な翻訳という営為

ーボリビアの異文化間・文化内・複言語教育(EIIP)におけるベシロ語授業を事例にー

中野隆基(明星大学)

1. はじめに

多文化主義や多言語主義を標榜する公教育や政策が世界的に行われているにもかかわらず、二項対立的な排除の図式は今日広くみられる現象である。では、文化人類学者をはじめとする調査者は、フィールドで出会う他者の声をどのように受け止め、どう付き合っていくのか。本発表では、この問いについて、1950年代以降の文化人類学における「文化の翻訳」をめぐる議論やその後の翻訳論の展開等を参照しつつ、ボリビアの公教育プログラム「異文化間・文化内・複言語教育(EIIP)」におけるベシロ語授業を事例として、洞察を深めたい。

2. 文化・言語人類学における翻訳論とイデオロギー：「声」の受け止め方・論じ方

かつて文化人類学者は、フィールドに出向いて異文化の調査を行い、民族誌を作成する過程を「文化の翻訳」と呼んだ。その後「文化の翻訳」は、民族誌を書く者と書かれる者や、両者の用いる言語間の権力関係あるいはイデオロギーを必然的に伴う行為として、批判的に再定位された(Asad,1986)。このようなポストモダンの流れを汲む議論は、人類学者の特権的ポジションの反省を促すと同時に、ミヒャエル・バフチンの多声性や対話といった概念を援用しつつ、インフォーマントの発言を間接話法ではなく、直接話法を用いて本文中に引用する「対話的」あるいは「多声的」民族誌などの実験的試みとも共鳴していた(Clifford, 1983)。

他方、Michael Silverstein に代表される言語人類学者達は、言及指示的側面だけでなく語用論的側面にも着目し、「翻訳」を「生成的で、新たな対象、実践、人格のタイプ、知識を生産する間ディスコース的な実践」であり、常に類似性と差異の比較を伴うがゆえ、必然的にイデオロギーを伴う政治的過程として位置付けてきた(Gal, 2015: 236)。この流れにおいて、バフチンの対話や多声性といった議論は、特定の人口の人格的なステレオタイプを喚起させる言語形式や、相互行為の過程でその言語形式が定着していく過程として論じられてきた。

3. 他者の「声」をいかに受け止めるか：ボリビアのEIIPの実践を事例に

本発表では上述の両分野の議論を参照し、政治的効果を伴う翻訳の語用論的側面に加え、他者の「声」の受け止め方を、ボリビアの先住民言語ベシロ語の学校授業における「歌」(県歌)の事例から検討する。

参考文献

- Asad, Talal (1986). The concept of cultural translation in British Social Anthropology. In Clifford, James, & Marcus, George (Eds.), *Writing culture: The poetics and politics of ethnography*, pp. 141-164. Berkeley, CA: University of California Press.
- Clifford, James (1983). On ethnographic authority. *Representation*, 1(2), 118-146.
- Gal, Susan (2015). Politics of translation. *Annual Review of Anthropology*, 44, 225-240.

ユーモアにみられる文化の即興パフォーマンス

ー石垣島のアンガマ問答を例にー

武黒麻紀子(早稲田大学)

1. はじめに

ユーモアは言語や身体、社会関係、事物、環境の共創から成る詩的なパフォーマンス（実践）である (Beeman, 2000). 本発表では、ユーモアを「多様な記号的要素を介して達成されるパフォーマンス」ととらえ、沖縄県石垣島の旧盆行事の儀礼的集団芸能で演者と観客が交わす問答の分析を試みる。ことば・身体・事物・環境・社会文化史を包括的にとらえようとする“pluri-modality”(プルリモダリティ)(Kataoka, 2018)の概念に依拠しながら、相互行為的に達成されるアンガマ問答を見ると、そのユーモアは、石垣島の地域社会において、余興としての意味以上に、地域の伝統や価値観を維持、継承する役割を果たす即興のパフォーマンスでもあることが分かる。

2. プルリ・モダリティ

言語・相互行為のマルチモーダル分析の発展は、これまで言及指示を中心軸に据えてきた言語研究の対象をジェスチャーや目線といった身体動作へと拡げていくことに大きく貢献している。Kataoka(2018)はここにさらに言語人類学的な意味での「社会文化史」の要素を加味し、コミュニケーション行動その他の振る舞いに刷り込まれてきた有形無形の“habitus”(Bourdieu, 1977)の解明を目指して“pluri-modality”の概念を提示した。これはかつてJakobsonが目指した地平一言語研究と文学・文化研究の接合ーに向かうための今日的な概念ともいえ、プルリ・モーダル要素の神髄に着目した研究は言語人類学で近年増えつつある (Harkness, 2017; Lempert, 2018 など)。本研究も同地平線上を目指した試みの初期にある。

3. アンガマ問答

旧盆期間になると石垣島では市内各地の青年会を中心に先祖供養行事の一つ「アンガマ」と呼ばれる集団芸能（先祖夫婦と 20 名近い子孫に扮した青年会メンバーが個人宅や施設を回っては、念仏、歌、踊りを披露し、見物客と珍問答を交わす儀礼）が繰り広げられる。真夏の太陽が沈む頃、面を被った先祖夫婦と皮膚を完全に隠した出で立ちの子孫が、三線や太鼓を打ち鳴らして集落を練り歩く。「死者」の先祖夫婦が話をするときは方言且つ裏声でなければならず、先祖夫婦と問答をする観客も顔を隠して裏声で話さなければならない。アンガマのユーモアは何よりもまず、こうした虚構の枠組みに則った中での外面的な装いや振る舞い、音声というプルリ・モーダルな記号要素を通して前景化される。

発表では、参加型で場の共有を前提として毎年繰り返されるアンガマのユーモアが、言語・相互行為さらに服装、観客、空間、盆関連装飾・供物、環境に至るすべてがアドホックかつ即興的に関わって成る詩的实践であり、それが地域社会での文化的価値の共創・維持継承に繋がっていることを示したい。

参考文献

- Beeman, W. (2000). Humor. *Journal of Linguistic Anthropology*, 9(1-2), 103-106.
- Bourdieu, P. (1977). *Outline of a theory of practice*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Kataoka, K. (2018). Poetics, performance, and pluri-modality: From Asia-Pacific perspectives. Paper presented at *Sociolinguistics Symposium 22*. The University of Auckland.
- Harkness, N. (2017). Transducing a sermon, inducing conversion: Billy Graham, Billy Kim, and the 1973 crusade in Seoul. *Representations*, 137, 112-142.
- Lempert, M. (2018). On the pragmatic poetry of pose: Gesture, parallelism, politics. *Signs and Society*, 6(1), 120-146.

日本における言語社会化と「責任」の文化的形成

—養育者—子ども間相互行為における物語り実践の分析から—

高田 明 (京都大学)

1. はじめに

文化相対主義を世に知らしめる牽引役を担った Ruth Benedict や Margaret Mead は、「文化とパーソナリティ論」を推し進めたことでもよく知られている。文化とパーソナリティ論は、諸文化を「大きく書かれたパーソナリティ」ととらえ、人はそれぞれ自らが生まれ落ちた文化の写しを社会化の過程で獲得していくと考えた (箕浦 1984)。こうした考え方は20世紀半ばに一世を風靡した後、文化人類学の内外からさまざまな批判を受けることになる。とりわけ、文化とそのメンバーである諸個人を同型のものとしてとらえようとするアプローチには、いくつもの境界が絡み合っていて成立しているであろう社会・文化を過度に本質化するとともに、多様な声を内包し、協調や分断を繰り返すことで複雑に組織化されている人々を画一的にとらえる恐れがある点で問題がある (Corsaro, 2015)。

2. 言語社会化論と「責任」の文化的形成

こうした批判を受けて言語社会化論は、より具体的な相互行為のなかで「言語を使うための社会化」と「言語を使うことを通した社会化」が再帰的に生じている過程に注目し、子どもを始めとする文化的な新参加者が「状況の文脈」をどのようにとらえ、それをどのように「文化の文脈」と関連させながら、これらに応じた適切な振る舞いを身につけていくのかについて明らかにしてきつつある (Ochs & Schieffelin 2012)。発表者らは、そうした言語社会化論のパースペクティブに立脚し、日本/日本語における相互行為において子どもが次第に応答の範囲を広げていくことで「責任」が文化的に形成されていく過程について研究を推進してきた (高田, 近刊)。本発表では、その一環として行われた養育者—子ども間相互行為における物語り(storytelling)実践の分析を紹介する。

3. 日本の養育者—子ども間相互行為における物語り実践

物語りは、会話のもっとも基本的かつ根本的な規則である話し手と受け手との間の順番交替(turn taking)をいったん延期し、話し手が複数の単位からなるターンを産出するという、拡張された語りである (Stivers 2013)。多くの社会において物語りは、「今ここ」の状況から離れた出来事について語り、より広い文脈と関連づけた文化的知識を相互行為に導入することで、「状況の文脈」と「文化の文脈」を橋渡しするための重要な言語ジャンルとなっている。ただし、まさにこの働きのため、会話の経験の浅い子どもが物語りの実践に適切に参加することは容易ではない。私たちの分析は、幼児が自分だけで物語りを語り始めるよりずっと前から、養育者は社会文化的に構造化された物語りのスクリプトに沿って幼児の発話を形作ろうとしており、幼児に物語りを開始、展開、終結させるためのさまざまな方略を生み出していることを示している。これらの方略を実行するためには、日本語を特徴づけるさまざまな文法項目(法のマーカー、相互行為詞、「中動態」、主語の非明示、敬語)、慣習的表現、慣用句が効果的に使用される。これにより物語りは、養育者と子どもの相互行為の過程で、注意、感情、道徳性を調整し、言語社会化を達成するための貴重な装置として働いている。

参考文献

- Corsaro, William A. (2015). *The sociology of childhood* (4th Edition). Thousand Oaks, CA: Pine Forge Press.
- Ochs, Elinor, and Schieffelin, Bambi B. (2012). The theory of language socialization. In Alessandro Duranti, Elinor Ochs and Bambi B. Schieffelin (Eds.), *The handbook of language socialization*. Malden, MA: Wiley-Blackwell, pp. 1-21.
- 箕浦康子 (1984). 文化とパーソナリティ論 (心理人類学) 綾部恒雄(編) 文化人類学15の理論 中央公論社 pp.95-114.
- Stivers, Tanya (2013). Sequence organization. In Jack Sidnell and Tanya Stivers (Eds.), *The handbook of conversation analysis*. Chichester, UK: Blackwell, pp.191-209.
- 高田 明 (近刊). 日本における言語社会化と「責任」の文化的形成 クック峯岸治子・高田 明(編) 日本語における言語社会化 ひつじ書房